学校だより　７月号

令和５年６月３０日

新吉田

http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/shinyoshida

横浜市立新吉田小学校

「心の余白」を残したままで

校長　関谷　道代

１ 年生の教室の前に展示されている絵を見ると、なんだか心があったかくなります。大人になったら、どんなに努力しても、絶対にこういう絵は描けないな、と思う傑作ぞろいです。

子どもは、描こうとしたものに集中するので、すべてを埋めようなどと考えていません。今、描きたいものひとつひとつに集中して、描きたいものを描きたい場所に描きます。心が解放されています。だから、「余白」のすがすがしい絵が多くあるのです。

大人になった私たちは、この「余白」を大切にしているかな、とふと思いました。むしろ、余白を作らないように埋めることにエネルギーを注いでいるのではないかと。

「ここには、何も書かないの？」
「色を塗らないの？」
つい、言ってしまいそうな自分をぐっとこらえて。
「こうあってほしい」に当てはまらないと、理想を一気に求めようとしそうな自分がいます。

「子どもの余白を丸ごと認める見方」が子どもの心をどんなにのびのびと解放させるか。傍からみたら、かなり凹凸した姿を「ここは余白になっているけど、ここは、すごい。新たに発見した一面から、この子どもの伸びしろを育てよう」というプラス思考の大人がそばに一人いるだけで、不思議と子どもの心は安定することを、目の前の子どもたちが教えてくれます。

心が動く瞬間。ひらめきが生まれる瞬間。
与えられたものでなく、時間を忘れて夢中になる。想像もしなかったことに出会い、心を動かされ、思考の羽を広げる。周りの状況と響き合って考えを深める。

幼い頃の「寄り道」の経験を思い出しました。
いつもより早く帰れる土曜日の帰り道が大好きでした。土曜日が4時間授業のあった頃の話です。抜けるような青空を見ると、あの頃のわくわく感がよみがえってきます。
用があって、ランドセルをカタカタ鳴らしながら走って帰る日もよいのですが、線路に沿って歩く通学路だった私にとって、線路わきの小さな花を摘んで帰るのがとても好きでした。次々に小さな花たちに、「こっちにもあるよ」「こっちこっち」と呼ばれているような、楽しい時間でした。きっと、子ども心に「今、夢中になること」の楽しさを満喫していたのでしょう。
あんまり夢中になって、手には花束でいっぱいなのに、遅くなって怒られて涙もいっぱい、おなかはペコペコだった記憶も、「余白があってこそ」の思い出です。

今日も、「できた！」とクレヨンだらけの手で、顔が隠れるような大きな画用紙の作品を、先生の所に持っていく子どもであふれています。先生とどんな対話が展開されるのでしょう。
７ 月は個人面談があります。待ち時間に、廊下に飾られている絵をこんな気持ちで眺めてみていただけたらありがたいです。大人も「心の余白」を・・・・・・。どうぞよろしくお願いします。

・・・・・・・・・・・子どもを誰一人取り残さない学校・子どもの良さを見つけ出して、引き出す学校・・・・・・・・・・・・・・・